

編集後記：今月号では「支部だより」として、九州支部が開催した「こども気象学会」の様子が報告されています。記事中で紹介のあった九州支部ホームページとあわせて見ると、参加した子どもたちの晴れ晴れとした表情が印象的で、彼らにとって大切な経験になったのではないかと思います。実施した九州支部の皆さんには、气象台や教育委員会、学校、参加者、その保護者などとの調整で、いろいろご苦勞もあつたことと存じます。そのご努力に敬意を表させていただきます。

さて、世は子どもの理科離れが著しいようですが、自分の狭い範囲の体験からいうと、子どもたちは今も理科が大好きです。小学校で気象関連の講演をさせていただいたこともあります。ちょっとした実験でも、皆、目を輝かせて見てくれます。もし理科離れが事実だとすると、足りないのは子どもの理科に対する好奇心ではなく、それをかき立てるような機会ではな

いでしょうか。何も「はやぶさ」や「ノーベル賞」のような「子どもに夢を与える」たぐいの気宇壮大なものでもなくてもいいのです。目の前で簡単な実験をしてあげるとか、自分で調べてみてはどうかと誘ってあげるとか、興味とやる気を引き出すような仕掛けが必要なのではないかと思います。

その意味で、今回の九州支部の取り組みは、未来の気象学会員を一人でも二人でも増やす、重要な取り組みだと感じました（未来といってもたかだか10年ちょっとで結果が出ますが…）。気象学会では教育と普及委員会や、他の地方支部でも子どもたちへの働きかけがなされているとお聞きしております。それらの活動が本誌で紹介されたことをきっかけにして、他の会員の皆さんも動き出すことになれば、「天気」も「理科離れ」を防ぐ一助になれる。皆さんからの積極的な活動案内・報告の投稿をお待ちしております。

(別所康太郎)